

親魏倭王

見過ごされてきた『史記』「古朝鮮方数千里」

田口 紘一 (会員番号 10408)

なぜ、倭国は帯方郡から一万二千余里なのか 従来の説

卑弥呼は景初2年(238)6月、魏の都、洛陽に朝貢し、魏の皇帝から、「親魏倭王」に任じられ、詔書と「親魏倭王」の印綬を下賜された、と『三国志』東夷伝倭人条(略して、通常『魏志』倭人伝、という)に記されている。景初2年6月については、「景初3年6月」の誤り、というのが通説である。「親魏倭王」という称号、つまり「親魏〇〇王」という形式の称号は、「親魏倭王」と「親魏大月氏王」以外にはないという。この称号は、魏の臣下ではなく、むしろ友好国としてその独立を承認しているような称号である。なぜ、魏はこのような高待遇の称号を倭国に与えたのか。そして、(帯方)郡から倭までの道程として、「郡より女王国に至るには万二千余里」という記事が記されている。どうして現在の北朝鮮の首都である平壤にあったとされる帯方郡から倭までが一万二千余里(5000km 余り)という途方もない距離なのか。その疑問は解かれていない。その記事は、帯方郡から、狗邪韓国・対馬・一大国・末盧国・伊都国・奴国・不弥国までの各区間が里数で示され、次に投馬国・女王の都とする邪馬台国へは日数で示されている。そして、21カ国の旁国が記された後、「郡より女王国に至るには万二千余里」というふうに記されている。前回(『魏志』倭人伝 倭国への行程 複数史料と陳寿の困惑(「其北岸」は陳寿の加筆か) 2023年3月)の論文において、この里数、日数、そして最後の郡・女王国間の「万二千余里」という情報は、それぞれ、陳寿が別の資料から得たもので、その相互の整合性が得られないため困惑、苦慮したとしたが、最後の「郡より女王国に至るには万二千余里」という情報は、岡田英弘氏や渡邊義浩氏の、西晋の建国の祖、司馬懿の徳を宣揚するために倭国の位置を実際とは異なるはるか遠くに設定した、つまり捏造した、という説に従った。今回、このことについて新たな発見をしたので、改めて詳細に検討したので報告したい。

まず、「親魏倭王」についての従来の有力な説は以下のようなものである。

「親魏大月氏王」については、『三国志』明帝紀に、

「太和3年(229)12月癸卯、大月氏(クシャーナ朝)王波調(ヴァースディーヴァ王)が、魏に遣使奉獻したので、「親魏大月氏王」に為した」

とある。大月氏王への賜与については、岡田英弘氏(『日本史の誕生』ちくま文庫 2008年)が次のように述べられている。

曹操は、行政と軍事の間の垣根をとりはらい、地方行政官が軍司令官を兼任することにした。(中略) 将軍たちは事実上の軍閥になっていった。

友好国に働きかけて、朝貢使節団を呼び寄せるのは、各方面の国境の防衛を担当する軍司令官の腕だったが、魏の文帝の時代にいちばん成績をあげたのは曹真だった。(中略)

文帝は226年に死に、息子の明帝が23歳の若さで帝位を継ぐことになった。文帝の遺言により、実力者の曹真・曹休・司馬懿と近衛部隊司令官の陳群の四人が新皇帝を後見することになった。つまり、集団指導制である。

明帝の時代になっても曹真の働きは目ざましく、227年には焉耆(カラシャール)王が王子を送ってきて魏の宮廷に留学させた。そして229年には、大月氏王・波調の使いが来訪した。大月氏すなわちクシャンで、波調はカニシカ王の二代あとの王、ヴァースディーヴァのことである。東は今の新疆ウイグル自治区の西部からトルキスタン、アフガニスタン、パキスタン、北インドまで支配する大クシャン帝国からの表敬訪問だから、魏がこれを大々的に宣伝に利用しないわけがない。ヴァースディーヴァには「親魏大月氏王」の称号を贈って、これほどの大国に支持されていることを、国の内外に誇示した。これでまた、曹真の株が一段とあがったことは言うまでもない。

つまり、国境を守る軍司令官は外部の国に働き掛けて朝貢を促すことも功績であり、曹真は洛陽から大国で、しかも一万六千余里の遠い国である大月氏国(クシャン帝国)からの訪問(朝貢)に成功したので、高く評価されたということである。

そして、倭国の卑弥呼に「親魏倭王」の称号が与えられた経緯について、次のように述べられている。

『三国志』の著者である陳寿の出身と、陳寿の保護者である張華の、晋朝を開いた司馬氏に負う恩義のために、『三国志』の記述は、司馬昭の父であった魏の有力者の司馬懿(晋の宣帝)の政治的立場に配慮して筆を曲げている個所が多い。(中略)

「東夷伝」の一部である「魏志倭人伝」には、帯方郡から女王・卑弥呼の都である邪馬台国までの距離を「万二千余里」と記している。当時の里程では、洛陽から平壤の楽浪郡までは「五千里」とされていた。帯方郡の正確な位置は分かっていないが、漢江の河口付近にちがいないから、かりにソウルとすれば、平壤からは550里である。これを加えると、「親魏倭王」卑弥呼のいる邪馬台国は、洛陽から17550里あまりの所にあることになる。

ところで、「親魏大月氏王」ヴァースディーヴァのいる藍氏城は、洛陽から『万6370里』の所にあるとされている。17550里と16370里とではほとんど同じである。これから考えると、「魏志倭人伝」が記す帯方郡から邪馬台国までの距離「万二千余里」は、卑弥呼をクシャン帝国に匹敵する大帝国の君主とし、邪馬台国をクシャンの都とほぼ等距離におく政治上の必要からわざと作りだされたものである。(中略)

司馬懿の公孫淵平定、東北アジア征服の功績をいやがうえにも持ちあげようとするれば、その象徴である「親魏倭王」卑弥呼の国を敵国・呉の背後の熱帯の大国にするのがもっとも効果がある。「魏志倭人伝」の諸国が南へ南へと並んでいるのはそのため、その証拠に、邪馬台国について「その道理を計るに、まさに会稽の東冶（福建省福州市）の東に在るべし」と言っている。そういうわけで、「魏志倭人伝」のいう倭人の三十国の距離と方向は、わざと作ったもので、三世紀当時の実情を伝えたものではない。

としている。

つまり、岡田氏によれば、中国周辺諸国の朝貢は、周辺諸国の意志ではなく、中国側の思惑で為されていたということである。これは周辺諸国からの発心で朝貢が行われたとする通説とは異なる。しかし、岡田氏の説は理に適っており、有り得ることのように思われる。

中国は、秦の始皇帝の時代から外部からの侵入に悩まされ、それを防ぐために万里の長城を築き続けた。周辺諸国が朝貢して、中国に臣下の礼を取ってくれば、その心配が消えるわけで、国境防備の観点からいえば、大きな利益となる。積極的に朝貢を促す理由は十分にあると考えられる。

また、渡邊義浩氏（『魏志倭人伝の謎を解く』中公新書 2012 年）は、次のように言っておられる。

邪馬台国を曹魏が庇護したように、狗奴国に孫呉が関りを持ったのか否かを伝える史料はない。しかし、その可能性が邪馬台国への破格な待遇と理念化の理由であった。（中略）

卑弥呼の朝貢は、こうした国際情勢を背景に行われた。曹魏が卑弥呼を「親魏倭王」に封建し、既定の回賜に加えて特別な恩寵を示したのは、倭国にも大月氏国に匹敵する重要性を認めたからに他ならない。石母田正（『日本の古代国家』昭和 46（1971）年）が説くように、曹魏が卑弥呼に「親魏倭王」の称号を賜与した理由は、孫呉の海上支配に対抗するためであった。（中略）

景初二年（238）八月以前に楽浪・帯方の二郡を滅ぼしても、この二郡は名目的には公孫淵の支配下に置かれている。新たに帯方太守に任命された劉昕が、公孫氏から曹魏へと支配者が交代したことを、公孫淵の滅亡を待たずに倭国に通知する蓋然性は低い。となれば、卑弥呼の遣使は、景初二年八月以降になると考えられ、六月である可能性は低い。倭人伝が記載する、卑弥呼の使者に対応した帯方太守は劉夏であり、明帝が任命した劉昕とは別人である。これも倭人伝の記載する「景初二年」が「景初三年」の誤写という証拠の一つである。

朝貢する夷狄が遠方であればあるほど、それを招いた執政者の徳は高い。邪馬台国を招いた執政者の徳を大月氏国のそれと同等以上にするためには、邪馬台国は洛陽から一万七千里の彼方にある必要が生まれる。洛陽から帯方郡までが五千里であるから、邪

馬台国は帯方郡から一万二千余里となる。これが、帯方郡から邪馬台国までの距離を一万二千余里としている理由である。

このように、倭人伝の距離と方位は、理念に基づいて作成されている。距離は大月氏国と同等、方位は呉の背後となるように設定されているのである。それは、『三国志』のなかで、ともに「親魏〇〇王」となる「親魏大月氏王」と「親魏倭王」とを対比させて表現するためであった。(中略)

司馬懿が公孫氏を滅ぼすとともに置かれた帯方郡の太守としては、太傅として上公の地位にあった司馬懿の徳を宣揚するためには、夷狄の使者をタイミングよく派遣しなければならない。卑弥呼の国際感覚が鋭敏なのではない。帯方郡の指示を正確に、さらにはその意味を明確に理解して、卑弥呼に伝える者がいたのである。あるいは、その者たちは、卑弥呼から外交に関する全権を委任されていた可能性もある。それが、第一回の貢物と、第二・第三回の貢物の比較から明らかになる(中略)

第一回の朝貢が少ないことは明らかである。金文京『三国志の世界』(平成17〔2005〕年)の推測するとおり、第一回は、本来、帯方郡にきた使者であり、曹魏の朝廷、しかも新皇帝の即位式のために派遣された使者ではない。そのため、十分な朝貢品も用意していなかったのである。

それを洛陽まで送り届け、司馬懿の徳が東夷に及んだことを言祝いだものは、帯方郡である。石母田が言う、卑弥呼の外に向いた開明的な顔とは、中国学(ママ)から見れば、辺境を支配する郡太守が当然の責務を果たしただけと捉えられるのである。(中略)

原初的な王権において、高度な外交を行わせた者は、通訳の問題から考えてみても、「渡来人」であろう。(下線は筆者挿入)

岡田・渡辺氏いずれも、かつて、曹真が洛陽から一万六千余里の遠い国である大月氏国(クシャン帝国)からの朝貢に成功し、高く評価されたことになり、司馬懿の徳を宣揚するために、帯方郡太守が郡の東南に位置する倭国を洛陽から一万七千余里、つまり帯方郡から一万二千余里離れた国としてその位置を捏造して、倭国の朝貢を促した、とするものである。

ただ、渡辺氏は上記の議論で、卑弥呼の第一回の貢物が少なかったことを使者の目的地が帯方郡にあったとしているが、卑弥呼に朝貢を促した帯方郡の使者は、卑弥呼らを洛陽にまで連れて行く計画を知らされていなかったのだろうか。氏の言うところの「帯方郡の指示を正確に、さらにはその意味を明確に理解して、卑弥呼に伝える者」とは矛盾するように思える。洛陽にまで連れて行くのであれば、それ相当の貢物を用意させたのではないかと思うのである。それとも帯方郡太守の思惑として「たまたま朝貢してきた」というふうに演出したのだろうか。それが氏の言うところの「正確にその意味を理解」に含まれているのだろうか。しかし、そうであったならば、郡太守は積極的に卑弥呼の朝貢を勧誘したことにはならないので、太守の功績は半減してしまうことになりはしないか。第一回の貢物が少なかったのは何か別の理由があったのではないか。たとえば、楽浪・帯方の二郡を奪ったばかりで、朝鮮

半島を完全に掌握できていたわけではなく、大量の貢物を運ぶとそれを狙って襲撃される危険もあったであろう。そのようなことを考えると、ここは朝貢させることが第一で、卑弥呼の国がそれほどの大国でないこともあり、貢物の質を云々する場合ではなく、むしろ、貢物の少ないのは遠い国から遠路はるばるやって来たことを逆に強調することができる考えた、というようなことも考えられるのではないか。

そこで、あらためて、渡辺氏が引いた上記の金文京氏の書を見ると、次のように記されている。

難升米が帯方郡にやってきた景初2年6月は、ちょうど劉昕と鮮于嗣が楽浪、帯方を平定した時に当たっている。30年にもおよぶ公孫氏の支配が終わり、魏というあらたな支配者がやってきたのであるから、倭が様子をうかがいに使節を送っても不思議ではない。(中略) 難升米らが当初から皇帝に朝貢する目的で来たのであれば、倭の使節が朝貢に来たと簡単に書けばよいのであって、使節がまず帯方に来て、皇帝への朝貢を求めたので太守の劉夏が彼らを都に送ったというようなまわりくどい書き方をする必要はない。これは帯方郡が平定されたばかりの二年六月に帯方郡に来た難升米らを、劉夏が自分の判断で都に送ったことを意味するものではないだろうか。そう考えるもうひとつの理由は、彼らの貢物の貧弱さである。

つまり、金氏の解釈は、倭が帯方郡に詣でたのは景初2年6月で帯方郡が公孫氏から魏のものになったため倭の方から様子をうかがいに使節を送ったという想定なのである。帯方郡から誘いを受けてのことではないという考えなのである。だから貢物が少なくてもなんら疑問を生じることはないといっているのである。それを渡辺氏は帯方郡から倭国に向けて、「帯方郡の指示を正確に、さらにはその意味を明確に理解して、卑弥呼に伝える者がいた」とし、また「景初2年でなく3年のこと」としたので議論がおかしなことになっているように思う。

しかし確かに、他国との国境に接する郡の役目として、郡は他国からの侵略を防がねばならない。そして、侵略を防ぐという消極的なことではなくて、逆に積極的な対策、つまり、蛮夷の国を臣従させる策として、朝貢を促す策をとる、ということは、国の安全対策上、きわめて有効な策であることは間違いない。そして朝貢してきた際には、献上された品の数倍にもなる返礼をする。そのことによって蛮夷の国を満足させ、朝貢を継続させることができるのだ。多くの返礼品を与えたからといって、それは、侵略に備えて国境に多勢の兵を駐留させることに比べれば、はるかに、経済的であることも自明なのである。

帯方郡が積極的に倭国へ朝貢を促したという説は、十分にあり得ることであると思われる。

『史記』の記事

しかし、よくよく考えてみれば、どうして魏帝は、倭国が帯方郡からさらに一万二千里も遠い国であるという、帯方郡太守の捏造を安易に受け入れたのだろうか、という疑問が出てくるのである。帯方郡太守にしても、帯方郡から、実際は 2500 里ほどの道の倭国を一万二千余里と偽って、もし偽りと知られたらどれほどの極刑を申し渡されるかわからない。そのような危険な行為を、したのであろうか。もともと中国には、成果を十倍にして報告するという習慣があったという（『三国志』魏書十一卷「国淵伝」に「賊軍を撃破した場合の公式文書では、一を十と（十倍に）表すのが習慣」とある）。しかし、それにしても、中国の多くの人々がそれを信じたのか、このくらいの誇張は許容する習慣があったのか、よくわからないと感じていた。

ところが、である。『漢書』「西南夷兩粵朝鮮伝」（粵＝越）および『史記』朝鮮列伝には、次のように記されているのである。

「朝鮮王満者、故燕人也。（中略）

會孝惠、高后時天下初定、遼東太守即約満為外臣、保塞外蠻夷、無使盜邊；諸蠻夷君長欲入見天子、勿得禁止。以聞、上許之、以故満得兵威財物侵降其旁小邑、真番、臨屯皆來服屬、方數千里。」

（朝鮮王の満は燕の人である。〈中略〉

惠帝・高皇后が天下を初めて定めたとき、遼東太守は満を外臣に為し、塞の外の蠻夷が侵略することの無いよう、そして、蠻夷の君長が天子に貢献しようとするのを妨げないということ約束した。それで、満は隣の小邑に侵攻し兵や威財物を得、また、真番、臨屯も皆服属させた。方数千里である。）

『漢書』と『史記』の朝鮮伝のこの部分は同一である。つまり、『漢書』は『史記』の記述をそのまま引用していることになる。

朝鮮王満とは衛満のことで衛氏朝鮮（古朝鮮）（前 195～前 108 年）を興した人物である。

なんと、ここに、朝鮮の地は「方数千里」とはつきり記されているではないか。「方数千里」とは、普通に考えれば「方五ないし六千里」ということであろう。

古朝鮮の範囲は諸説あって定説は定まっていないうである。図 1 はその一つであるが、遼東との境を為す涇水を鴨緑江や清川（鴨緑江と平壤の中間にある川）とする説や、臨屯の地を半島東部一帯とする説がある。また真番は樂浪（現、平壤市を中心とした地域）の南部（ソウルを中心とした地域）とする説や後の馬韓の地域、



Wikipedia「古朝鮮」より

図 1 古朝鮮の位置

あるいは半島南部全域、つまり「真番」とは「辰弁莫(=馬)」で「辰韓・弁韓・馬韓」を指すとする説があるようだ。

『漢書』地理誌には、「それ楽浪海中に倭人有り。分かれて百余国と為る。歳時を以て来たり献見すと云う」、とある。

倭国は楽浪郡(後に楽浪郡を分割し南側を帯方郡にした)からみれば、朝鮮の向こう側の海中にあるのだから、朝鮮の地をたとえば「方六千里」とし、その六千里四方の地を水行(海上航行)でめぐれば、その対角線の地への道程は、六千里+六千里で朝鮮の地を半周めぐらただけで一万二千里となるのである。図3に「三国志時代の朝鮮半島の認識・方四千里」を示しているが、方五~六千里となるとこれよりさらに大きくなる。『三国志』には南の呉の孫権が拵げた最大領地が「方数千里」と表現されているから(『三国志』呉書周瑜伝)、朝鮮半島の大きさは、呉の領地と同じくらいの大きさと考えていたことになる。

当時の魏においては、『漢書』や『史記』の朝鮮に関する記述は知っていたはずなので、倭の地が遼東から少なくとも一万里以上あるかもしれないことは、少なくとも宮廷内ではよく知られた事実となっていた可能性が高い。

中国では、『史記』の記述された時代(紀元前2世紀)から朝鮮の地は、「方数千里」と現実とはかけ離れた大きさに認識されていたということだ。帯方太守の捏造などではなかったのだ。

そうであれば、帯方太守劉夏が、遼東から一万里も離れていると認識されている倭国を朝貢させ、司馬懿を、大月氏国を朝貢させた曹真と肩を並べられるように称揚しよう、と考えても不思議ではない。それはまた、帯方郡太守としての功績にもなるのであるから。

なぜ一万二千余里なのか

魏朝廷では倭国の位置認識として、この史記の記事から、上記のように、倭国は「方数千里」という韓の国の向こう側にあるのだから、遼東の先千里の帯方郡からは少なくとも九千里は離れていると見なされる。洛陽・帯方郡間は五千里なので洛陽からは一万四千里以上離れているのではないかと考えられていたに違いない。もう一つ、「倭人は帯方東南、大海の中に在り」という方向についての倭人伝冒頭の記事は、秦の時代の徐福の伝説にあるように倭と見られる蓬萊という島は、中国大陸の東方海上すぐ近くには無く、はるか遠くにあると認識されていたことから、楽浪・帯方郡から見れば、それは南ではなく、東南の方向にあるにちがいない、と考えていたであろう。

それでは、帯方郡から倭国までの道程を、どうやって一万二千余里と定めたのか、という疑問が生じる。『史記』には「古朝鮮、方数千里」としか記されていない。

考えられるケースを挙げると、

1. 帯方太守が洛陽から一万六千余里の大月氏国より少し遠い道程として、洛陽から一万七千余里となるように、帯方郡から一万二千余里と定めた

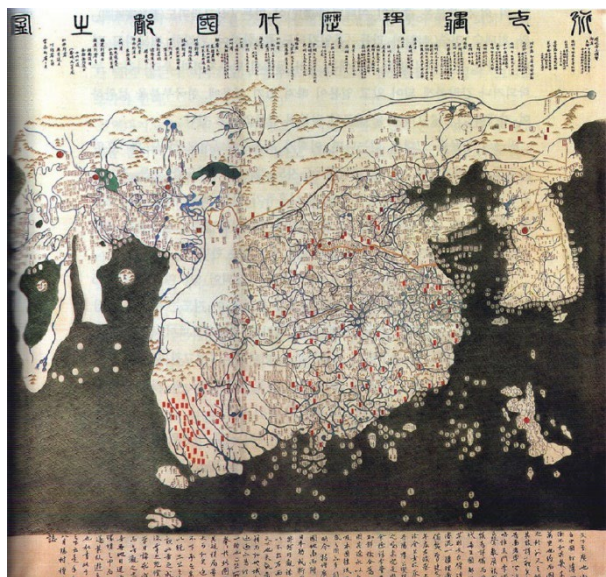
2. 岡田英弘氏や渡邊義浩氏のいうように、帯方太守が倭に朝貢を働きかけたとすれば、その使者が倭国まで行ったであろうから、その時に、その使者が太守の命によって、途中の経路、つまり、狗邪韓国・対馬国・一大国・末盧国・伊都国などの間を勘案して、その積み上げとして1万二千余里という数字をはじき出した。
3. 魏朝廷が司馬懿を宣揚するためには、大月氏国に匹敵する遠さにあればよいので、「古朝鮮数千里」という記事だけで充分であるとも考えられる。そうすると、「一万二千余里」は後で定められた可能性が高くなる。そうであれば、倭国への使節として倭国へ渡航した梯儁の可能性が高いであろう。梯儁が倭国までの各地の詳細な道程を記録し、最後に、帯方郡から一万里程度、洛陽から一万数千里、できれば大月氏国よりすこし遠くに、となるように、梯儁としては、皇帝が最も満足するように、各地までの道程を比例倍増してそれを概数化し、「帯方郡から一万二千余里」という数値を定めた。

「方可四千里」は誰が定めたのか

『史記』や『漢書』において、朝鮮の地は「方数千里」と記述され、その認識が、延々と続き、途中魏の時代に「方可四千里」と数値化されたが、15世紀まで続き、李氏朝鮮で「混一疆理歴代国都之図」の図が描かれるなど、朝鮮半島は現実に比べて桁外れに大きく認識され続けたことになる。

一度、お上で定められてしまうと、それを覆すことは非常に困難である。現地へ行ってそれが近いところであるとわかって、それを告げれば皇帝の面目を潰すことになり、命が危ない。逆に、お説のとおり遠い国でありましたと報告すれば満足してもらえる。それは現代でさえそうである。上司の不正な意向に抗って痛めつけられた事件は、あらゆる世界で毎日のように報道されている。

その『魏志』韓伝に、朝鮮半島の地が「方可四千里」と改められたのは、誰が定めたのであろうか。「方四千里」という記述は『魏略』にもあり、『翰苑』(竹内理三校訂 吉川弘文館 1977)に記載されている『魏略に曰く』には、次のように記されている。



龍谷大学 h p ・ 龍谷の至宝より

図2 混一疆理歴代国都之図

魏略に曰く、韓は帯方の南に在り。東西は海を以って限りと為す。地は方四千里。一を馬韓と曰い、二を辰韓と曰い、三を弁辰と曰う。辰韓は古の辰国なり。馬韓は其の西に在り。其の人士着して、稲を種え、綿布を作ることを知る。鯤陁(テガク)の東、鯤人は海中の州、鼈波(ゴウハ)に居る。俱(トモ)に海に有り。

「稲を種え、綿布を作ることを知る」までは『魏志』韓伝の冒頭と同じである。ただし、『魏志』には「南は倭に接する」という句が加えられている。「鯤人云々」は『魏志』にはない。

『史記』の書かれた時代、つまり、燕人の満の国(衛氏朝鮮)は中国の臣国として遼東の東に構えたが、その後、前漢の武帝のとき滅ぼされ(前108年)、その領地は楽浪・真番・臨屯・玄菟の四郡になった。その後、『三国志』時代には、高句麗の台頭もあり、玄菟郡は西方、つまり遼東の北方に移転した。

したがって、『三国志』時代は、朝鮮・韓の領域は『史記』の時代、つまり前漢前半の時代より縮小されている。そのことが考慮され、魏の宮廷内で、「方数千里」よりも小さい値として「方四千里」と考えるようになった可能性もある。しかし一方、倭の使節が貢献し、倭王を「親魏倭王」に任官し、使者を倭に送った際の使者からの報告に朝鮮半島の南部の「狗邪韓国」までの帯方郡から道程が「七千里」とあったことから、「方四千里」と推測したのかもしれない。つまり、「方五千里」より小さく「方三千里」より大きいと見なしたということである。「方四千里可」という語が『魏略』にあることから、陳寿が「方数千里」を「方可四千里」に書き換えたという可能性は消える。そうすると陳寿の前に、①洛陽の宮廷で、衛氏朝鮮を滅ぼした後、そこが楽浪など四郡の領地となったので、残りの面積として「方四千里」を導きだし定めた、②帯方郡から倭国までの里数記事を書いた倭国への使者が定めた、③里数記事の報告(狗邪韓国まで七千里)を基に魏宮廷内で検討して定めた、④『魏略』を記した魚豢が定めた、という四つの可能性があることになる。



図3 三国時代の朝鮮半島の認識・方四千里

なぜ見逃されたのか

それにしても、どうしてこのような「朝鮮、方数千里」という、『史記』や『漢書』に記載

されている重大な事項がいままで不問にされてきたのだろうか。日本史専門の研究者のみならず、中国や東洋の歴史を専門と称しておられる研究者までが何も指摘されないのはどういうことなのか。ここに書かれた「朝鮮、方数千里」が、古代「朝鮮」という所は諸説あって、朝鮮半島のことでないのであるならば（実際は、衛氏古朝鮮はかつての楽浪・真番・臨屯・玄菟の四郡の位置であるから、現在の北朝鮮の辺りになるとされている）、一般人には朝鮮半島のことと受け取りかねないので、否定の忠告を掲げられてもよいのではないかと思うのである。それとも・・・、と考え続けていて、気づいたことがある。

「方〇〇里」

その一つは、「方〇〇里」が面積を表すということを、日本の研究者はよく理解していないからではないか、ということである。対馬が「方可四百里」と記されていることに対して、「島の形は細長いのに正方形のように表現している」という人が多々見受けられるのだ。もちろん、これが面積を表すことは当たり前のことと考えている学者も多くおられると思うがその人たちは当たり前すぎてなにも言われない。

古代中国には、九章算術という数学書があり（紀元前1～2世紀に成立とされている）、種々計算の仕方を問題集型式で書かれている。その中の「少廣 12～16」に面積から一辺の長さを求める問題、つまり平方根を求める問題が出されている。少廣 12 の問題は「今有積五萬五千二百二十五步。問為方幾何？。答曰：二百三十五步。」というもので、面積 55225 歩の方はその平方根（つまり、正方形の一辺の長さ）を計算すればよく、235 歩となるということである。これは面積を「方〇〇」で表す習慣があるということであろう。

対馬に限らず、「一大国（一支国）方可三百里」、「韓方可四千里」、「高句麗方可二千里」、「吳方数千里」、と記されている。面積を表す表現にこれ以外の表現はない。そしてこの表現は、とてもイメージし易い表現だと思う。最近よく表現されることに「東京ドームと同じ広さ」とか、「琵琶湖と同じ広さ」というのがある。東京ドームや琵琶湖の広さを知っている人は、その広さをイメージし易い。「方〇〇」は、実はこれと同じ表し方なのである。例えば「100 平方メートルという面積」は「一辺 10 メートルの正方形の面積」と同じである。「100 平方メートル」とは、「1 平方メートル」が百個ということだが、「1 平方メートル」の面積はイメージできるが、百個は数が多すぎてイメージし難い。「一辺 10 メートル正方形」ならば、10 メートルはイメージできるし、その正方形であるからその広さはイメージし易い。だから対馬「方四百里」はその面積が「四百里四方」と同じ面積であると言っているのであって、対馬が正方形を為していると言っているわけではないのである。対馬の大きさは長さ約 70 キロメートル、幅約 15 キロメートルである。里数で表すと、倭人伝に記された里数は一里＝約 75 メートルほどであるから、 $70\text{km} \times 15\text{km} = 930 \text{里} \times 200 \text{里} = 18.6 \text{万平方里} = \text{方 } 430 \text{里} (430 \text{里} \times 430 \text{里})$ となって、ほぼ正しく表されているのである。

道程と直線距離の混同

もう一つは、道程と直線距離の混同である。道程は歩けば測ることができるが直線距離は歩くだけでは測ることができない。その都度の方向を知る必要があり、最終的には地図を描

く必要がある。地図を描いてその図上で直線距離を測る以外に方法はない。磁石のない時代には、実際にはその方向を精密に知る方法がない。したがって、古代中国では誰でもおよそ認識できる八方位（東西南北とその中間の方位）以上の方位は示されない。それで地図を作ろうとすると極めて大ざっぱなものにしかならないのだ。

その直線距離がわからないまま、古代中国では、面積を表そうとして、直線距離の代わりに道程によって「方〇〇里」と示しているようなのである。もっとも中国の長江以北の主要地はほぼ平原で道は直線的に作られているので、道程と直線距離に大きな差は生じない。例えば洛陽・遼東（瀋陽市）間は直線距離 1220km=2900 里（1 里=0.42km で計算）に対し『後漢書』地理志では 3600 里としているのでその比は 1.24 倍である。一方南部は山地があり、道は山を迂回しなければならないので道程は長くなる。例えば、交州合浦（現、合浦市）と洛陽間は直線距離 1520km=3620 里に対し地理志では 9191 里としているのでその比は 2.54 倍にもなる。

そのようなわけで、古代中国ではその領地を方一万里と称していた。道程で示すと。南北でいえば、洛陽から北の幽州の北端あたりまでが約 3000 里、南の交州までが 9000 里、併せて 1 万 2000 里、東西は東の揚州までが 3000 里、西の益州まで 5000 里、合わせて 8000 里、そうすると 12000 里×8000 里=9600 万平方里=9800 里四方≒方 1 万里となる。

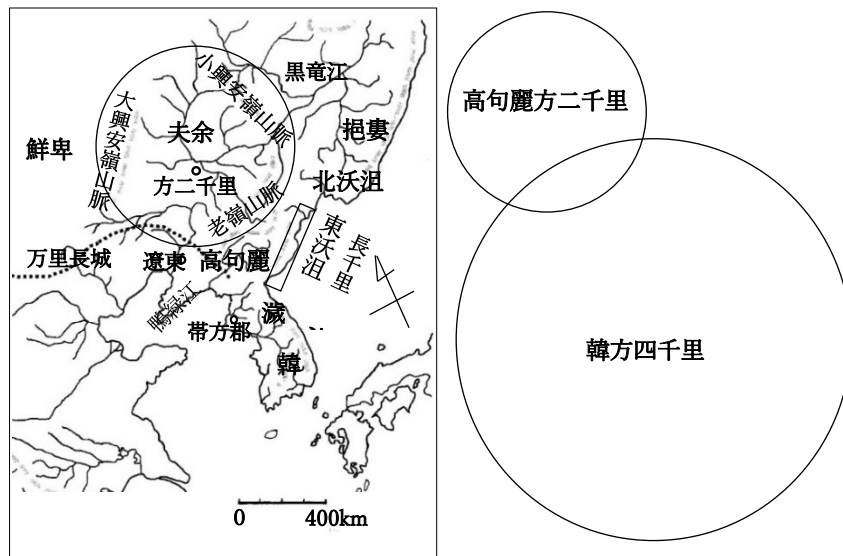
しかし、実際の面積を求めてみると、その範囲は、現在の中国から西方の各自治区、及び北方の黒竜江省・吉林省を除いた範囲であろうから、その面積はざっと 500 万平方キロメートル（中国全土は 960 万平方キロメートル）くらいであろう。これは約 2800 万平方里であり、言いかえれば約「方 5300 里」となるのである。つまり、「方一万里」と称しているが、実際は「方 5000 里」ほどの面積となるのである。

洛陽や長安（現西安）を都にしてきた王朝は平原の中で活動していたため、道程と直線距離にさほどの差はなく、このような面積の捉え方をしても、それが実害を与えるものではないために、中国の人々はそれに甘んじてきたのであろう。農地などの面積は平原上で行われるので道程と距離は一致するのである。しかし、東夷のような山地の多いところは、稀にそこに行った交易人などからさまよい歩いて国の端まで行った日数を聞き出して、それから換算したとすれば、その道程はその直線距離の何倍も大きな値となり、その値で「方〇〇里」とすれば、『史記』で示された「古朝鮮方数千里」という値となっても不思議ではない。図 4 に、『三国志』に記された東夷諸国の面積を円で示しているが、夫余の面積（大興安嶺山脈・小興安嶺山脈・老嶺山脈・万里長城に囲まれた領域）や、東沃沮の長さは、夫余は平原が多く、東沃沮は海岸線の長さで表示しているので、それぞれ実面積、実長さとの比は小さいが、高句麗（鴨綠江中・上流域）や韓（現在の韓国の領域）は峻険な山岳地帯が多いので実面積との比は非常に大きくなっていることがわかる。

従来通説では、韓の地と倭国のみが、その大きさが数倍に誇張されているとされているが、図 4 で示されるように高句麗も大きく誇張されているのである。

「古朝鮮方数千里」と、現実とはかけ離れた面積とした『史記』の記事も道程から導き出

されたものとすれば、決して根拠のないものではないであろうことが推察されるのである。



夫余・東沃沮は平原と海岸長さなので表示と実面積・実長との比は小さいが
高句麗・韓は峻険な山岳地帯なので実面積よりはるかに大きく表示されている

図4 朝鮮半島とその北方地域の国々の面積表示

以上のように、古代中国では、領域の面積として「方〇〇里」という表し方をしたが、その一辺に当る長さは道程であったため、山地などで道程と直線距離の比が大きいところでは実際と全く合わなくなっていた。しかし、その面積を実際に用いる場面はほとんどないので、人々は、その実際との相違を気にすることはなかったし、普段は無関心であったと思われる。

無関心ということに対して気付いたことがある。先の投稿（「倭国への行程 陳寿の得た複数資料と困惑」）において記したことだが、「狗邪韓国」についての議論に次のようなものがある。

すなわち狗邪韓国は、熊川湾と洛東江とに限られた、金海郡萊山面附近の地とする。狗邪韓国といわれる以上、かつては弁辰狗邪国と同じ国でその勢力範囲であった。後に海を渡って半島に侵入して来た倭人の占拠するところとなり、狗邪韓国として狗邪国より分離され、倭人の朝鮮半島における橋頭堡となり、・・・

（水野祐『評釈魏志倭人伝』128頁 雄山閣出版1987年）

ここでは、弁辰狗邪国は韓の国であるが、狗邪韓国は倭人の国といているのである。狗邪韓国に付けられている「韓」の字が何を意味するかについては、全く無頓着なのである。

水野氏は、日本の天皇は万世一系ではなく、三つの王朝が交代したという「三王朝説」を唱えた著名な歴史学者である。もっとも、夷狄の国の固有名詞はその音に相当する漢字を当

てたのであって、使われた漢字に意味はないということもあって、この「韓」の字も意味はないとしているのかもしれないが、それはあまりにも技術論に偏りすぎていると思う。「カン」という音を発する字は他に多くあるのであるから、わざわざ「韓の地」の国の名に「韓の国」と間違いかねない「韓」の字を選ぶとは、常識では考えられないことと思うのである。

議論の展開に心を奪われ、基本のことをつい忘れるということはよくあることではあるが、このように普段、ほとんど関心のない事項は、大事なときでも見過ごされてしまってきたのではないだろうか。

「古代朝鮮方数千里」も、もともと「方〇〇里」という語に関心がない上、『史記』という紀元前に記述された歴史書にその信憑性を疑っていたことが、朝貢してきた倭国の遠さについて中国人がどのように思考したのかを正しく推察できなかった、ということであろうか。

ともあれ、中国では、紀元前二世紀の『史記』の書かれた時代から、朝鮮半島の大きさは「方数千里」という認識があった。そして、倭までの道程は帯方郡から一万里をかなり越えるであろうということは、魏朝廷では常識的認識であったということになる。